〈翻訳論文〉

『ヘイムスクリングラ』は誰が書いたのか？：作品と著者／分散執筆者の複雑な関係

(‘The Distributed Authorship of *Heimskringla*’)

ヨーン・カール・ヘルガソン
（伊藤盡訳、小澤実解説）

バルト=スカンディナヴィア研究会『北欧史研究』第31号別刷
２０１４年１０月

論文

『ヘイムスクリングラ』は誰が書いたのか？：作品と著者／分散執筆者の複雑な関係

ヨーン・カール・ヘルガソン (Jón Karl Helgason)
伊藤　盡訳

ストゥルラの息子スノッリ（1179-1241）が国際的な名声を得ているのは、中世の北欧文学のうち、二つが彼の作とみなされているためである。一つはノルウェーの歴代の王のサガを集めた『ヘイムスクリングラ』であり、もう一つはスカンディナヴィアの異教神話を扱った『散文のエッダ』である。さらに、スノッリは『ニャールのサガ』の作者ではないかと言う少数意見もあった。『エギルのサガ』を彼の著作としたがる学者がかなりの数に上ることも事実だ。『エギルのサガ』の中で、多面的な性格を持つ主人公 — 禿のグリームルの息子エギル — が歌ったとされている宮廷詩（dróttkvætt; ドロット・クヴェット）がスノッリ作である可能性を示唆する者さえいる。中世アイスランド文学がどのように生まれたか、一般的に私たちはあまりにも知識がないために、ある特定の作品の作者を明確にしようとする多くの研究者にとってスノッリの名前は非常に魅力的なあまり、彼らの学説に影響を与えずにはいられないようだ。だが、中世アイスランド文学にスノッリが果たした貢献を過大評価してきた可能性はないだろうか？ この問いかけの答を追求するのが、本論考での私の目的だ。今日私たちが著者という概念を個々人に通常当てはめるやり方では、中世の散文テクストの著者の特定はできないということは確かにあるにしても、スノッリが『ヘイムスクリングラ』や『散文のエッダ』を著したという証拠はあまりにも少ないのである。

近年この問題を掘り下げた学者の一人は、口誦伝承と文芸の伝統との区別は以前考えられていたほど明確なものではないということを強調し、アイスランドのサガ集成が存在するに至った過程を叙述する際、「書き換え」(rewriting) や「分散執筆」(distributed authorship) といった概念を用いた。[1] この後者の概念が言わんとすることは、アイスランドのサガ文学とは — スラヴィカ・ランコヴィッチの言葉を引用するならば —「時空間的に分散させられた作品（オブジェ）」ということになる。[2] 彼女の「伝承テクストの中では誰がしゃべっているのか？：アイスランド人のサガとセルビア叙事詩の「分散執筆者」について」という論文の中で、ランコヴィッチは次のように提言する。「伝承芸術の一作品が生まれるのは、互いに関係し合う『ユニット』（歌い手、サガの語り手/作者）」というネットワークの中であり、「それぞれのユニットは局部的（我々の研究対象の場合は、かつまた創造的であり、時に独創的でもある）には貢献するのであるが、特定の誰かが作品全体の発展に責任を持つなどということは決してない」と。[3] 同様の視点を持って、今日我々が『ヘイムスクリングラ』創作に関してスノッリただ1人にのみ与えている後世の賞賛に値するのは、実際は長く列なす「作者たち」であり、スノッリは、恐らく、ただその列を構成する1人に過ぎないのではないかと、私は提言したい。

『ヘイムスクリングラ』も『散文のエッダ』も、スノッリ自身の手によって書き残されたとは考えられてはいない。『散文のエッダ』の現存最初期の写本は 14 世紀前半のものと見なされており、つまりはスノッリがレイクホルトの住まいで敵に攻撃されて死んだ 1241 年より数十年も後に書き残されたものばかりだ。スノッリが『散文のエッ

ダ』全体の作者であると名前を挙げられているのも、これら最初期写本の中でもたった一つ『ウプサラ写本』の以下の序文だけである：「この本はエッダと呼ばれる。本書はこの本に記されているやり方で、ストゥルラの息子スノッリによって編まれた」。[4] スノッリはまた、『ウプサラ写本』中の詩の表題および他の資料から『散文のエッダ』の最終章である「韻律論（ハウッタル）」の作者だとされている。[5] しかし、その他の初期の写本のどれにも『散文のエッダ』の著者が誰であるかを明記しているものはない。事実、16 世紀末のある年代記に、スノッリの死の記録に続いて、「彼はエッダ、数多の学術書、アイスランド人のサガを編んだ」と断定する記述が書かれるまで、スノッリが『散文のエッダ』全体を生み出した人物として特定されたことはなかった。[6]

スノッリと『ヘイムスクリングラ』との結びつきはさらに頼りない。現存する写本のどれ一つとして彼を著者だと仄めかすものはない。14 世紀の王のサガの一つ『トリュッグヴィの息子オーラヴルの最も大いなるサガ』に、幾つかのエピソードの典拠がスノッリであることを述べる文章が見出せる。一例としては「スノッリは次のように言う。スヴェイン王は自分の船を長蛇号に突っ込ませ、一方、スウェーデン人オーラヴルは自分の船の船尾を、トリュッグヴィの息子オーラヴルのその大船にぶつけた」とある。[7] しかしながら、『ヘイムスクリングラ』のどこにも、そのような記述を確認することはできないのだ。さらに言うならば、スノッリが著者であることが仄めかされたのは、やはり 16 世紀の 1551 年のこと、それもデンマーク語訳された王のサガの選集においてである。この情報は、そのデンマーク語翻訳者が利用した写本から得られたものの、その写本自体は利用された後いつとも知れず失われたのだと、一般的に研究者達は信じている。[8] だが、これは単なる仮説に過ぎない。[9] アイスランド文学史を近年著したスヴェッリル・トーマスソンは、この仮説が満足のいくものでないことについて、「この仮説に依拠したスノッリの著作者としての信憑性ははなはだ疑わしいと考える者もあろう。だが、これ以外に著作者が誰であるかを示す証拠は他になく、また今日までこの証言に異を唱える者はなかった。」と論じた。[10] しかしこの物言いからも、そろそろ異を唱える者が現れてもよい、ということになりはしないか。だが、この場での私の主な関心事はスノッリの著作者としての本質的な立場であって、どの範囲までがスノッリの著作と考えられるか、といったことではない。そこで今回の私の議論は『ヘイムスクリングラ』の様々なテクストがどのようにして産み出されていったか、その過程と手法に焦点を絞りたいと思う。[11]

スノッリがサガ執筆に拘わった事実に関しては、ソールズルの息子ストゥルラ（1214-1284）が 13 世紀後半に書き、『ストゥルルンガ・サガ』に収められた『アイスランド人のサガ』が、スノッリ自身の同時代に残された証拠として認められる。ストゥルラは、スノッリの甥の一人が「レイクホルトにて長い時を過ごし、スノッリが編纂した何冊ものサガの書物を書き写すことに腐心した」と書き留めている。[12] ここでスノッリが文芸創作活動を行う際の描写が、『エッダ』のウプサラ写本の中の記述と同じ表現で為されていることは興味深い事実である。スノッリは「編纂した（アイスランド語で言う setti saman（集めた、合わせた））」のだという描写は、『ヘイムスクリングラ』の創作を大変的確に表現している。いやむしろ、スノッリ（もしくは誰であれその任に当たった人物）については著者というよりも編纂者もしくは改訂者と呼ぶ方がずっと自然なまでに、この表現は的確なのである。

『ヘイムスクリングラ』は一般的に 16 編の伝記に分けられるのが普通である。その伝記のほとんどは特定の一人のノルウェー王の人生を詳細に語る。文学史的な視点に照らすならば、この大部の書物の編纂者が行ったことは、9 世紀から 12 世紀にかけて続いたノルウェーの王朝の一大歴史絵巻を完成させるため、古い写本に見つけられる広範かつ多様な作品を基本素材にして、大小様々なあれやこれやの変更や補足を書き加えながら、全てを合わせて仕上げたということになる。今日、もし一人の作家が同じような行動にでるならば、剽窃のそしりを受けたり、場合によっては裁判所に訴えられてしまうかも知れない。もちろん、事実は、今日我々がもっぱら行う口誦伝承と書かれた作品の区別や元の作品と写本の区別が、仮にそ

ういう区別が中世に存在したとしても、少なくとも今よりずっと不鮮明だったということだ。『ヘイムスクリングラ』の典拠となった数多くの作品の中には、12 世紀や 13 世紀初頭にノルウェーで書かれ、今日まで残された作品も含まれる。例えば、その中には『ノルウェー王列伝』あるいは『ファクルスキンナ』など有名な作品がある一方で、今日では失われてしまった数知れぬ作品もあって、そのうちの二作品はシーグヴァトルの息子〈学者〉サイムンドル（1056-1133）と、ソルギルの息子〈賢者〉アリ（1067 頃-1148）という中世アイスランドを代表する二人の識者の著作もあったかも知れない。ロフトルの息子ヨーン(1128-1197；彼はスノッリの養父だった）は、自分の一篇の詩の中でハラルドル美髪王の 10 人の後継者の名を上げているが、更にこのスカルド詩人は自分が「賢者サイムンドルが語ったように彼らの生き様を詠った」と主張する。[13] サイムンドルの文芸創作は、アイスランド人修道士スノッリの息子オッドゥルによって 1200 年頃にラテン語原典からアイスランド語に翻訳された『トリュッグヴィの息子オーラヴルのサガ』の中でも、同様に言及されている。例えば、そこではオーラヴル王はノルウェー国民に善き法と善き慣習を提供したのだ、と述べつつ、「そのようにサイムンドルはオーラヴル王について自分の本で書いている」と裏書きする。[14]『ヘイムスクリングラ』の編纂者は、その序文の中で、より直接的に、賢者アリへの謝辞を述べる。彼は言う、賢者アリは古い学識と新しい学識について、またアイスランド入植についての本を著したのみならず、「ノルウェーとデンマークの王、さらにはイングランドの王たちの伝記」を扱った著書を出した、と。[15]

現在では失われてしまった典拠と『ヘイムスクリングラ』とを比べることは不可能であるけれども、『ヘイムスクリングラ』内の最後の王のサガの一つである『ハラルドルの息子たちのサガ』はある意味で例外と呼べる作品である。この作品はある闘争について語っている。かたやマグヌースの息子ハラルドル・ギッリ（1103-1136）の息子たちであるインギとシグルズル、かたや盲目王マグヌースと「放浪助祭」シグルズルとの間の、ハラルドル・ギッリ没後のノルウェーの覇権をめぐる争いである。フヴァレル（オストフォル地方）で大きな戦いがあり、盲目王マグヌースは倒れる。この戦いで起きた様々な出来事や会話がサガにはかなり詳しく語られている。この戦いの最中、『ヘイムスクリングラ』の編者は物語りの進行を突然止め、自分の典拠について説明を始める：

> ステインの息子だった医者ソルゲイルの息子であるハッルは、インギ王の側近の一人だったが、この事件の場に臨んでいた。ハッルはこの事件の顛末をオッドゥルの息子エイリークルに話して聞かせた。エイリークルが書き留めたのがこの話である。彼が書き留めた書物は『フリッギャルスティッキ』（訳注「背骨の一片」の意）と呼ばれる。この書物の中に、ハラルドル・ギッリと彼の二人の息子、また盲目王マグヌースと「放浪助祭」シグルズルについて、彼らの死に至るまでがすべて語られている。エイリークルは明晰な頭脳の持ち主で、この当時ノルウェーにいた。エイリークルの話の中には、ハラルドルの二人の息子の下にいた地主「《腹》のハーコン」から直接聞いた話も含まれている。《腹》のハーコンと彼の息子たちもこの戦いに参加し、会話の中にいた。エイリークルはまた、これらの出来事について自分に語ってくれた別の人物らの名前も挙げている。彼らは頭が良く、信頼できる人物で、この事件が起きているときにすぐ側におり、何が起きているかを目で見、耳で聞いたのである。けれど、物語の中にはエイリークル自身が聞き、目にした事柄も含まれている。[16]

『フリッギャルスティッキ』（この原典写本は今では失われてしまったが）に収められた物語は多くの者が再話してきたことは明らかだ。オッドゥルの息子エイリークルについては、我々はこれ以上何一つ知ってはいないが、彼の果たした役割を現代風に言うならば、『フリッギャルスティッキ』のある部分では、彼は個人秘書かジャーナリストのようであり、また別の箇所では、彼自身が証言をし、歴史家のように振る舞っている。上の引用で「エイリークルが書き留めたのがこの話である」

とあることから、『ヘイムスクリングラ』の編者はそれほどの改編を行わずに、『フリッギャルスティッキ』に書かれていた話を単に書き写したに過ぎなかったようにも思われる。このことは、『ハラルドルの息子たちのサガ』と、『フリッギャルスティッキ』に基づいて書かれた他の中世の写本中の対応箇所の文章を比較しても確かめられる。[17]

『ハラルドルの息子たちのサガ』以外では、『ヘイムスクリングラ』のサガ編纂者の執筆への関与はもっと広くかつ重要であり得たとは思われるが、それがどの程度のものだったかを確証を持って言うことはできない。というのも、彼は恐らく、後に失われてしまった追加資料を用いたかも知れないからだ。先達となる口誦伝承と様々な点で類似したサガという文字文学のこの特殊な伝統を創造する上で、『ヘイムスクリングラ』の編纂者が創造的かつ能動的な役割を時に果たしたことは疑いようがない。彼の生み出した作品自体が幾つもの層から成り立っていることを物語っている。この作品テクストは、先達たちの物語からあれこれを追加し、改訂し、削除した個々人の多くの声を合体させたものなのだ。言い換えれば、『ヘイムスクリングラ』に一人の作者はいない。むしろ多くの作者が存在すると言えよう。

『ヘイムスクリングラ』のテクストが持つ様々な層の成立をよりよく理解するためには、三つの異なる王のサガから或る特定の場面を見るのがよい：すなわち（1）『ファクルスキンナ』、（2）スノッリの息子オッドゥルによる『トリュッグヴィの息子オーラーヴルのサガ』そして（3）『ヘイムスクリングラ』に収められた『トリュッグヴィの息子オーラーヴルのサガ』である。この場面では、トリュッグヴィの息子オーラーヴル王（963-1000）は、臣民をキリスト教に改宗させることに腐心している。しかし、ノルウェーの西部の海岸線にあるグーラシングの住民をキリスト教に改宗させる目的で訪れたとき、住民たちはその条件として王妹アーストリーズルを若く才能溢れる在郷の豪族に嫁がせるよう求めた。『ファクルスキンナ』ではこのやりとりは次のように短く、客観的に語られる：

> オーラヴル王は、キリスト教を広めることに反対した有力豪族たちを処刑した。その一方で、ある豪族にはキリスト教布教のために多くの土地を与えた。スキャールグルの息子エルリングルはオーラヴル王の妹アーストリーズルを娶り、キリスト教を広めるという王の目的に合わせてこの地方の東部すべてにキリスト教を広めた。[18]

オッドゥルの『トリュッグヴィの息子オーラヴルのサガ』のアイスランド語訳では、この逸話はより詳しく語られている。王と地元住民とのやりとりはドラマ化され、その対話は以下のように物語れる：

> 王は語った。「そなたらの願いは何か？」彼らは王自身の妹をエルリングルに娶らせて下さいと願い出た。エルリングルは良い家系でこの結婚には申し分ないのだから、と。
> 「余は彼がよい男で有能であると耳にしている。だから、もしそれが大きな利益を生み、そなたらの心を神の恩寵に向けるという良い結果を生むのであれば、それこそが余の望みだ」
> それからオーラヴルは何百人も、この地方全体をキリスト教に改宗させた。それからエルリングルはアーストリーズルを娶りに行き、彼女を得て、彼は大いに富んだ。[19]

『ヘイムスクリングラ』ではことはたやすく進まなかった。アーストリーズルは、はじめこの結婚を嫌がり、王から象徴的な脅迫を送られてから渋々と承諾したのである。

> 王は言う。「我らが最善の和解に至るために、そなたは余に何を願い求めているのか？」するとオルモーズルは言う。「何よりも先ず、あなたの妹御であるアーストリーズル様を、我らの親族であるスキャールグルの息子エルリングルに嫁がせて戴きたい。我々はエルリングルのことを現在ノルウェーにいる全ての若者の中で最も有望な男と呼んでいる」オーラヴル王は言う、この婚姻は良いものであると彼自身も思う、と。また言葉を重ねて、エ

ルリングルはよい家に生まれ、結婚相手に最も相応しいように見える、と言いながら、それでも、アーストリーズルこそがこの件についての答を持っている、と述べた。その後、王は自分の妹とこの件について話をした。すると彼女は「王の娘として生まれ、王の妹でいることに、あまり益はないようですね」と彼女は言う「もしも私が平民と結婚しなければならないとすれば。別の結婚話が来るまでもう一年待ってみることは出来ないものかしら」そして二人は話し合いをここで打ち切った。[……] オーラヴル王は部下に命じて、アーストリーズルが飼っていた一羽の鷹を捉えさせ、その羽をすべて引き抜かせてから、鷹を彼女に送り返した。それを受け取ったアーストリーズルは言った「なるほど兄は怒っておいでです」と。それから彼女は立って、王のもとに向かった。王は彼女を歓迎した。するとアーストリーズルは言った。王の望みのままに、彼女のためになるように取り計らって下されば、自分は嬉しいのだ、と。「余が考えたことは」王は口を開く「生まれのよい人物をこの国の中で余の欲するままに位を上げることは出来ないものか、ということだ」それから王はオルモーズルとエルリングル、またすべての親族を話し合いのために呼び寄せると、その場でこの求婚話の決着を付けた。こうしてアーストリーズルはエルリングルと婚約した。それから王は民会を招集し、住民にキリスト教への改宗を促した。民会ではオルモーズルとエルリングルが王の求める案件を主張し、彼らの親族すべてがそれに賛同した。それに異を唱えるものは誰もいなかった。それから全ての民が洗礼を受けて、キリスト教徒になった。[20]

この文章を読むとき、スノッリ・ストゥルルソンが書き手として何故称揚されてきたかを理解することができる。人物描写は明確で、記憶に残るべき場面がちりばめられ、読者の心に響く会話が挿入されている。また、ここで示したような文章比較によって、スノッリを褒めることも正当化されてきた。『ヘイムスクリングラ』は、アイスランドで執筆された「王のサガ」というジャンルを、芸術と歴史が融合する高いレベルに押し上げた。しかしながら、我々の見たこの例における問題点は、果たして『ヘイムスクリングラ』の編纂者が自分の作品を仕上げる時に目の前に置いていたのがオッドゥル・スノッラソンの文章だけだったのか、一概には言えないことだ。もしかしたら、口承であれ、文書であれ、今では残っていないが中間的な典拠が存在したのかも知れない。レイヴルの息子グンロィグル（1219 年頃没）はアイスランド北部のシングエイリにあった修道院でオッドゥルの同僚の僧侶だったが、「トリュッグヴィの息子オーラヴル」について、ラテン語で別のサガを 1200 年頃に書いたことが知られている。ラテン語のそのサガは今では失われてしまったが、ラテン語からアイスランド語に翻訳された数章が、13 世紀半ばの『キリスト教徒のサガ』と 14 世紀に書かれた『トリュッグヴィの息子オーラヴルの最も大いなるサガ』の中に書き残されたと考えられている。そのような断片的証拠から学者たちが導き出した結論は、グンロィグルはオッドゥルのサガを典拠として利用しながら、さらに自分なりに多くを書き足したのであろう、ということだ。例えば、『トリュッグヴィの息子オーラヴルの最も大いなるサガ』におけるエルリングルとアーストリーズルの結婚に至るまでの記述は、『ヘイムスクリングラ』のそれと酷似しているが（特に異なる部分は下線で示した）、どちらがオリジナルなのかを判別することは困難だ。いや、実際、もし両者が、現在失われたグンロィグルの書いたもう一つの『トリュッグヴィの息子オーラヴルのサガ』に基づいているならば、それも道理となる。

王は答える「我らが最善の和解と合意に至るために、そなたは余が何を承諾することを望んでおるのか」するとこの豪族は答える「何よりも先ず、我らの親族であるスキャールグルの息子エルリングルに、あなたの妹御であり、トリュッグヴィの娘であるアーストリーズル様を娶らせて戴きたい。彼のことを我らはノルウェーにいるすべての若者の中で最も有望な男と呼んでいる」王は答える「この婚姻は良く、名誉あるも

のなので余には好ましく思える。なぜならエルリングルは裕福で生まれも良く、兄弟の中で最も美男子だから。だがそれでも、アーストリーズルこそがこの件についての答を持っている。だから余は彼女を訪い、彼女にとってこの婚姻がどのように思われるかを尋ねよう。なぜなら、神のキリスト教徒が歩むように、私は最大限努めようと思うから。それが私の力の及ぶ限り喜んで奉仕しようとするものだ。それから王は自分の妹にこの件について相談し、王の考えるようにエルリングルとの結婚を彼女が望むか尋ねた。アーストリーズルは答えて言った「私が王の娘であり、両親ともに同じである王の妹であることに、あまり益はないようですね、もし私が平民と結婚させられるというのであれば。別の結婚話が来るまでもう一年待ってみることは出来ないものかしら」二人はそのようにして話を終えた。彼女は去って行った。王は部下に命じて、アーストリーズルの飼っている一羽の鷹を捉えさせ、その羽をすべて引き抜かせてから、鷹を彼女に送り返した。それを受け取ったアーストリーズルは言った「なるほど兄は怒っておいでです」と。直ちに彼女は立って、王に会いに行った。彼は彼女を歓迎した。そこで彼女は言った。王の望みのままに、彼女のためになるように取り計らって下さい、と。「余が考えたことは」王は口を開く「この国で、余が望むままに爵位を授ける力を余は持っていたいということだ。」それから王は、エルリングルとその親族すべてを自分のもとへ呼び寄せ、この結婚話が話し合われた。こうしてアーストリーズルはエルリングルと婚約した。その後、王は民会を開かせ、農民たちにキリスト教への改宗を要請した。この王の命令をエルリングルが主張し、彼の親族全員が賛成側に回った。全ての平民が承諾した。なぜなら豪族たちに敢えて反対するものは誰もいなかったからである。そこですべての人々は洗礼を受け、キリスト教徒になった。[21]

内容的に興味深いことだが、『トリュッグヴィの息子オーラヴルの最も大いなるサガ』が『ヘイムスクリングラ』と非常に大きく食い違う部分は、『オッドゥルのオーラヴルのサガ』の『ヘイムスクリングラ』内に現れない文章と完璧に重なっている。この例から、異なる中世のテクストと写本間の関係を決定づけることが如何に複雑になり得るかが示されている。

今回、私がここで提示したかったことは、『ヘイムスクリングラ』の著者としてストゥルラの息子スノッリを挙げることは、少なくとも現代的な意味においては、極めて誤解を招きやすいということである。著者をスノッリと同定することは、スノッリという名前とこの素晴らしい王のサガのコレクションの関係を曖昧にするばかりでなく、我々が扱うテクストが、何世代にもわたる歴史家たち、再話作者たち、編纂者たち、そして写字生たちが様々な形で関与して形作られたものであるという事実を忘れさせてしまう。私は『ヘイムスクリングラ』を編纂した偉業への評価を貶めようとしているわけではない。ただ、『ヘイムスクリングラ』編纂者の行った貢献度は、オッドゥルの息子エイナルの『フリッギャルスティッキ』執筆時のそれとは、恐らく別種のものであることに注意を向けようとしているのである。彼の編纂作業は、素材を様々な方向から織り直すことで、一反の統一感のある織物を創造することであった。『ヘイムスクリングラ』の編纂者が幾章にもわたる作品を整える際、自分の詩人としての目利きを活かし、芸術的かつ観念的なある目的を抱いて執筆したことは疑いようがない。しかしながら、彼が利用した典拠作品のあるものが、いやその多くのものが失われてしまっている現在、彼が行った「著者」としての貢献がどれほどのものであったかを見きわめるのは不可能だと思われる。

注

[1] Cf. Jón Karl Helgason. *The Rewriting of Njáls Saga: Translation, Politics and Icelandic Sagas*. Clevedon and Buffalo: Multilingual Matters, 1999 and Slavica Rankovic. "Who Is Speaking in Traditional Texts? On the Distributed Author of the Sagas of Icelanders and Serbian Epic Poetry." *New Literary History* 38.2 (2007), pp. 293 – 307.

[2] Slavica Rankovic. "The Temporality of the (Immanent) Saga". *Dating the Sagas. Reviews and Revisions.* Ed. Elsa Mundal. Copenhagen: Museum Tusculanum Press, University of Copenhagen, 2013, p. 150.

[3] Slavica Rankovic. „Who Is Speaking in Traditional Texts? ", pp. 299 – 300.

[4] "Bók þessi heitir Edda. Hana hefir saman sett Snorri Sturluson eftir þeim hætti sem hér er skipað." *Uppsala-Edda. Handritið DG 11 4to*. Ed. Heimir Pálsson. Reykjavík and Reykholt: Bókaútgáfan Opna, Snorrastofa, 2013, p. 152. An English translation from Anthony Faulkes. "Introduction." In Snorri Sturluson. *Edda. Prologue and Gylfaginning*. Second edition. Ed. Anthony Faulkes. London: Viking Society for Northern Research, University College, 2005, p. viii. なお本日本語版翻訳にあたって、中世アイスランド語からの引用はすべて翻訳者による直接の翻訳であり、英語訳からの重訳ではないことをお断りしておく。

[5] Cf. Sverrir Tómasson. "Erlendur vísdómur og forn fræði." *Íslensk bókmenntasaga* I. Ed. Vésteinn Ólason. Reykjavík: Mál og menning, 1992, p. 534.

[6] "hann samsettj Eddu: og margar adrar frædibækur jslendskar saugur." *Oddaannálar og Oddverjaannáll*. Ed. Eiríkur Þormóðsson and Guðrun Ása Grímsdóttir. Reykjavík: Stofnun Árna Magnússonar á Íslandi, 2003, p. 146.

[7] "Svo segir Snorri að Sveinn konungur lagði sín skip að Orminum langa, en Ólafur sænski lagði út frá og stakk stöfnum að ysta skipi Ólafs Tryggvasonar". *Ólafs saga Tryggvasonar en mesta* II. Ed. Ólafur Halldórsson. København : Munksgaard, 1961, p. 264.

[8] Cf. Jakob Benediktsson. "Hvar var Snorri nefndur höfundur Heimskringlu?" *Skírnir* 129 (1955) 118-27 and Ólafur Halldórsson. "Sagnaritun Snorra Sturlusonar." *Snorri—átta alda minning*, pp. 113-38. Reykjavík: Sögufélag, 1979.

[9] Cf. Jonna Louis-Jensen. "Heimskringla—et vark af Snorri Sturluson?" *Nordica Bergensia* 14(1977): 230-45 and Jonna Louis-Jensen. "Did Snorri Surluson write "Heimskringla"?" " *Snorri Sturluson and the Roots of Nordic Literature*, pp. 96 – 101. Ed. Vladimir Stariradev. Sofia: St. Kliment Ohridski University of Sofia, 2004.

[10] "það má vera að sumum þyki heimildirnar um ristörf Snorra vera rýrar í roði, en önnur gögn þekkjast ekki, og hingað til hafa þessir vitnisburðir ekki verið vefengdir." Sverrir Tómasson. "Veraldleg sagnaritun 1120-1400." *Íslensk bókmenntasaga* I. Ed. Vésteinn Ólason. Reykjavík: Mál og Menning, 1992, p. 368.

[11] Patricia Pires Boulhosa は、*Icelanders and the Kings of Norway. Medieval Sagas and Legal Texts.* The Northern World 17 (Leiden and Boston: Brill, 2005) の 6-21 頁において『ヘイムスクリングラ』がスノッリの著作だとした 16 世紀の定説に、理に適った疑義を呈した。

[12] "löngum þá í Reykjaholti ok lagði mikinn hug á at láta rita sögubækr eftir bókum þeim, er Snorri setti saman". *Sturlunga Saga*, I. Eds. Jón Jóhannesson, Magn+us Finnbogason and Kristján Eldjárn. Reykjavík: Sturlungaútgáfan, 1946, p. 342. English translation from *Sturlunga Saga*, I. Tr. Julia H. MacGrew and R. George Thomas. New York ´ Twayne Publishers and The American-Scandinavian Foundation, 1974, p. 242.

[13] "innta ek s*va* / æfui þ*e*ira / s*em* sæm*un*dr / sagdi hin*n* frodi". *Den norsk-islandske skjaldedigtning*, A I. Ed. Finnur Jónsson. København: Rosenkilde og Bagger, 1967, p. 584.

[14] "Svo hefir Sæmundr ritat um Ólaf konung í sinni bók". Oddur Snorrason. *Færeyinga saga; Ólafs saga Tryggvasonar*. Ed. Ólafur Halldórsson. Íslenzk fornrit 25. Reykjavík: Hið íslenzka fornritafélag, 2006, p. 232.

[15] "bæði konungaævi í Noregi og Danmörk og svo á Englandi". Snorri Sturluson. *Heimskringla* I. Ed. Bergljót S. Kristjánsdóttir, Bragi Halldórsson, Jón Torfason, Örnólfur Thorsson. Reykjavík: Mál og menning, 1991, p. 4. English translation from Snorri Sturluson. *Heimskringla. History of the Kings of Norway*. Transl. Lee M. Hollander. Austin: University of Texas Press and The American-Scandinavian Foundation, 1991, p. 4.

[16] "Hallur sonur Þorgeirs læknis Steinssonar var hirðmaður Inga konungs og var viðstaddur þessi tíðindi. Hann sagði Eiríki Oddssyni fyrir en hann reit þessa frásögn. Eiríkur reit bók þá er kölluð er Hryggjarstykki. Í þeirri bók er sagt frá Haraldi gilla og tveimur sonum hans og frá Magnúsi blinda og frá Sigurði slembi allt til dauða þeirra. Eiríkur var vitur maður og var í þenna tíma löngum í Noregi. Suma frásögn reit hann eftir fyrirsögn Hákonar maga, lends manns þeirra Haraldssona. Hákon og synir hans voru í öllum þessum deilum og ráðagjörðum. Enn nefnir Eiríkur fleiri menn er honum sögðu frá þessum tíðindum, vitrir og sannreyndir, og voru nær svo að þeir heyrðu eða sáu atburðina, en sumt reit hann eftir sjálfs sín sýn eða heyrn." Snorri Sturluson. *Heimskringla* II, p. 776.

[17] Bjarni Aðalbjarnarson, 「まえがき」Snorri Sturluson. *Heimskringla* III. Ed. Bjarni Aðalbjarnarson. Íslenzk fornrit 28.

Reykjavík: Hið íslenzka fornritafélag, 1979, p. lxiii – lxvii. 研究者の間では、「ハラルドルの息子たちのサガ」は写本『モルキンスキンナ』から『ヘイムスクリングラ』の編者が書き写したと一般的に信じられていることは注記しておくべきだろう。しかしながら、オッドゥルの息子エイリークルについて言及している事実は（その言及は『モルキンスキンナ』には見当たらない）、少なくともフヴァレルの戦いに関しては、『フリッギャルスティッキ』が直接の典拠であることを明らかに示唆している。

18 "Ólafr konungr lét drepa stóra hǫfðingja, er í móti vildu rísa kristninni, sumum veitti hann mikit lén til at efla sitt ørendi. Erlingr Skjálgssonr fékk Ástríðar, systur Ólafs, ok hafði hann konungs ørendi allt austr í land." *Ágrip af Nóregskonunga sǫgum; Fagrskinna – Nóregs konunga tal*. Ed. Bjarni Einarsson. Íslenzk fornrit 29. Reykjavík: Hið íslenzka fornritafélag, 1984, p. 145.

19 "Konungur mælti: „Hvers er beizt af yðr?" Þeir báðu hann gipta systur sína Erlingi, er aldri skorti góða ætt. „Heyrt hǫfum vér hans getit að góðum hlutum ok ágætum, ok ef hér má svá mikit í kaupask, at þá vili þér með blíðu til Guðs miskunnar snúask, ef svá mikill ávǫxtr mætti verða, þá vil ek þenna kost." Ok síðan kristnaði hann mǫrg hundruð manna ok ǫll þeirra herǫð, ok gekk Erlingr síðan at eiga Ástríði ok hafði með henni stórar eignir." *Færeyinga saga; Ólafs saga Tryggvasonar*. Ed. Ólafur Halldórsson. Íslenzk fornrit 25. Reykjavík: Hið íslenzka fornritafélag, 2006, p. 222.

20 "Konungur segir: „Hvers viljið þér mig beiða til þess að sætt vor verði sem best?" Þá segir Ölmóður: „Það er hið fyrsta ef þú vilt gifta Ástríði systur þína Erlingi Skjálgssyni frænda vorum er vér köllum nú mannvænstan allra ungra manna í Noregi." Ólafur konungur segir að honum þykir líklegt að það gjaforð muni vera gott, segir að Erlingur er ættaður vel og maður hinn líklegsti sýnum en þó segir hann að Ástríður á svör þessa máls. Síðan ræddi konungur þetta við systur sína. „Lítt nýt ég nú þess," segir hún, „að ég em konungsdóttir og konungssystir ef mig skal gifta ótignum manni. Mun ég enn heldur bíða nokkura vetur annars gjaforðs." Og skildu þau ræðuna at sinni. [...] Ólafur konungur lét taka hauk er Ástríður átti og lét plokka af fjaðrir allar og sendi henni síðan. Þá mælti Ástríður: „Reiður er bróðir minn nú." Síðan stóð hún upp og gekk til konungs. Hann fagnaði henni vel. Þá mælti Ástríður, segir að hún vill að konungur sjái fyrir hennar ráði slíkt sem hann vill. „Það hugði eg," segir konungur, „að eg mundi fá vald til að gera þann tiginn mann sem eg vil hér í landi." Lét konungur þá kalla til tals Ölmóð og Erling og alla þá frændur. Var þá talað bónorð þetta. Lauk svo að Ástríður var fòstnuð Erlingi. Síðan lét konungur setja þingið og bauð búendum kristni. Var þá Ölmóður og Erlingur forgangsmaður að flytja þetta konungsmál og þar með allir frændur þeirra. Bar þá engi maður traust til að mæla í móti. Var þá skírt það allt fólk og kristnað." Snorri Sturluson. *Heimskringla* I, pp. 206 – 207.

21 „konungr svar(ar): hvat vilit þer af mer þiggia til þess at vór sætt og samþykki verði sem bezt. þa svar(ar) þessi hófðingin: Þat er hít fyrsta ef þu uill gipta Erlingi Skialgs s(yni) frænda vórum Astriði systur þína d(ottur) TryGva konungs. hann kollum ver nv mann uænstan allra vngri manna iNoregi. konungr svar(ar). likligt þickir mer að þat giaforð se gott ok sæmiligt. þviat Erlingr er auðigr ok ættaðr vel ok en fríðazti synvm. en þo æ Astríðr svór þessa mals. Nv mun ek leíta við hana. huersv henni er vum gefit. þviat flest man ek til vinna að Guðs kristní fae fram gang. þat er ek ma auðuelldliga veíta af sialfs mins valldi. Siðan ræddi konungr þetta mal við systur sína ef hun uilldi giptaz Erlingi at hans raði. Astriðr svar(ar). Lítt nyt ek þess þa s(egir) hún at ek er konungs d(ottir) ok konungs systir samborin i baðar ættir ef mik skal gipta vtignum manni. mun ek enn helldur biða nóckura uetr aNars giaf orðz. skilðo þau sva sitt tal. gekk hún æ brottu. konungr let taka hauk er Astríðr atti og let plokka af allar fiaðrarnar ok sendi henni siþan. þa mælti Astriðr: Reiðr er broðir minn nu. Stoð hun upp þegar og gekk til fundar við konung. hann fagnaði henni vel. hun s(agði) þa að konungr skylldi sea fyrir hennar raði slikt er hann uill. þat hugði ek s(egir) hann at ek mundi hafa valld til að gera þann tíginn mann her i landi sem ek vil. let konungr þa til sin kalla Erlíng ok alla þa frændr og var talat vm bonorð þetta. lauk sva að Astriðr var fóstnut Erlíngi. Siþan let konungr setia þing ok bauð bondum kristní. Var þá Erlingr forgangs maðr at flytia þetta konungs erendi ok þar með allir frændr hans. Játti þvi þa allr lyðr. þviat engir vurðu til mótmæla hófþingiar. var þa skirt þat folk alt ok kristnat." *Óláfs saga Tryggvasonar en mesta*. Ed. Ólafur Halldórsson. Editiones Anamagnæanæ A 1. København: Ejnar Munksgaard, 1958, pp. 323–324.

Bibliography

Aðalbjarnarson, Bjarni. "Formáli." In Snorri Sturluson. *Heimskringla* III, pp. v – cxv. Ed. Bjarni Aðalbjarnarson. Íslenzk fornrit 28. Reykjavík: Hið íslenzka fornritafélag, 1979.

Ágrip af Nóregskonunga sǫgum; Fagrskinna – Nóregs konunga tal. Ed. Bjarni Einarsson. Íslenzk fornrit 29. Reykjavík: Hið íslenzka fornritafélag, 1984.

Benediktsson, Jakob. "Hvar var Snorri nefndur höfundur Heimskringlu?" *Skírnir* 129 (1955): 118-27.

Boulhosa, Patricia Pires. *Icelanders and the Kings of Norway. Medieval Sagas and Legal Texts.* The Northern World 17. Leiden and Boston: Brill, 2005.

Den norsk-islandske skjaldedigtning A I. Ed. Finnur Jónsson. København: Rosenkilde og Bagger, 1967.

Faulkes, Anthony. "Introduction. " In Snorri Sturluson. *Edda. Prologue and Gylfaginning*, pp. xi – xxxii. Second edition. Ed. Anthony Faulkes. London: Viking Society for Northern Research, University College, 2005.

Færeyinga saga; Ólafs saga Tryggvasonar. Ed. Ólafur Halldórsson. Íslenzk fornrit 25. Reykjavík: Hið íslenzka fornritafélag, 2006.

Halldórsson, Ólafur. "Sagnaritun Snorra Sturlusonar." *Snorri – átta alda minning*, pp. 113-38. Reykjavík: Sögufélag, 1979.

Helgason, Jón Karl. *The Rewriting of Njáls Saga: Translation, Politics and Icelandic Sagas.* Clevedon and Buffalo: Multilingual Matters, 1999.

Louis-Jensen, Jonna. "Heimskringla – et vark af Snorri Sturluson?" *Nordica Bergensia* 14 (1977): 230 – 45.

Louis-Jensen, Jonna. "Did Snorri Sturluson write "Heimskringla"?" *Snorri Sturluson and the Roots of Nordic Literature*, pp. 96 – 101. Ed. Vladimir Stariradev. Sofia: St. Kliment Ohridski University of Sofia, 2004.

Oddaannálar og Oddverjaannáll. Ed. Eiríkur Þormóðsson and Guðrun Ása Grímsdóttir. Reykjavík: Stofnun Árna Magnússonar á Íslandi, 2003.

Ólafs saga Tryggvasonar en mesta II. Ed. Ólafur Halldórsson. København: Munksgaard, 1961.

Rankovic, Slavica. "Who Is Speaking in Traditional Texts? On the Distributed Author of the Sagas of Icelanders and Serbian Epic Poetry." *New Literary History* 38.2 (2007): 299 – 300.

Rankovic, Slavica. "The Temporality of the (Immanent) Saga." *Dating the Sagas. Reviews and Revisions*, pp. 149 – 94. Ed. Elsa Mundal. Copenhagen: Museum Tusculanum Press, University of Copenhagen, 2013.

Snorri Sturluson. *Heimskringla* I-III. Ed. Bergljót S. Kristjánsdóttir, Bragi Halldórsson, Jón Torfason, Örnólfur Thorsson. Reykjavík: Mál og menning, 1991.

Snorri Sturluson. *Heimskringla. History of the Kings of Norway.* Transl. Lee M. Hollander. Austin: University of Texas Press and The American-Scandinavian Foundation, 1991.

Sturlunga saga I. Eds. Jón Jóhannesson, Magnús Finnbogason and Kristján Eldjárn. Reykjavík: Sturlungaútgáfan, 1946.

Sturlunga Saga I. Transl. Julia H. McGrew and R. George Thomas. New York: Twayne Publishers and The American-Scandinavian Foundation, 1974.

Tómasson, Sverrir. "Erlendur vísdómur og forn fræði." *Íslensk bókmenntasaga* I, pp. 517 – 71. Ed. Vésteinn Ólason. Reykjavík: Mál og menning, 1992.

Tómasson, Sverrir. "Veraldleg sagnaritun 1120-1400." *Íslensk bókmenntasaga* I, pp. 263 – 418. Ed. Vésteinn Ólafson. Reykjavík: Mál og menning, 1992.

Uppsala-Edda. Handritið DG 11 4to. Ed. Heimir Pálsson. Reykjavík and Reykholt: Bókaútgáfan Opna, Snorrastofa, 2013.

解説

小　澤　実

本稿は、2013 年 11 月から 12 月にかけて来日した、アイスランド大学教授ヨーン・カール・ヘルガソンによる研究報告である。

ヨーン・カール・ヘルガソン教授は、1965 年にアイスランドに生まれ、現在アイスランド大学アイスランド文化・比較文化学部の教授職をつとめている。アイスランドの中世文学であるサガを専門とし、いまや当該分野の基本研究書となった『ニャールのサガを書き換える』（*The Rewriting of Njáls Saga. Translation, Ideology and Icelandic Sagas*. Topics in Translation 16. Clevedon: Multilingual Matters, 1999）で博士号を取得した。その後、サガ文学だけではなく、文化受容や翻訳理論、中世文学と現代文学の比較について研究範囲を広げ、アイスランド語と英語双方で多数の研究業績をあげている。紙媒体の仕事にとどまらず、「ウィキサガ」（Wikisaga）と題したとウェブ上でサガ・テキストのハイパーリンク辞典作成にも取り組んでいる。現在を代表するアイスランド文学研究者の一人といって差し支えない。

本報告は、2013 年 11 月 25 日（月）の午後、立教大学池袋キャンパス地下第一会議室において開催された「中世北ヨーロッパにおける古アイスランド語テクスト」（Old Icelandic Texts in Medieval Northern Europe）と題した国際ワークショップで報告された。ヨーン・カール自身を含め 8 人の報告者による、日本で初めての中世アイスランドの専門的国際会議である。半日という短い時間であったが、修士論文の経過報告を行うジュニアセッション（元根典子「王族聖人及び王族への崇敬　中世ノルウェーでの聖オーラヴの一例」と水野志保「19 世紀イギリスにおけるアイスランドへの関心」）に引き続き、専門家による３つのセッションが連続して開かれた。第 1 セッション「アイスランド初期社会への視線」は、和田忍「アングロ・サクソン期のイングランドにおけるゲルマン民族的信仰と慣習の痕跡について　古英語と古アイスランド語文献の比較から」と小澤実「アイスランドにルーン石碑は建立されたか。歴史学的解釈の試み」、第 2 セッション「中世アイスランド語テクストの著者性」は成川岳大「なぜアイスランド人は北欧の王位継承紛争において、王位請求者の主張を支持する記述を残すようになったか？　12 世紀スカンディナヴィア史とノルド語歴史記述の勃興」とヨーン・カール・ヘルガソン「『ヘイムスクリングラ』を書いたのは誰か：作品と著者の複雑な関係」（本稿）、第 3 セッション「記録、記憶、神話」は松本涼「アイスランドの「建国神話」：ハーラル美髪王の圧政と植民」と伊藤盡「テッラの息子ブーリとヨルズの息子ソール：北欧神話の大地母神より産まれし神：再訪」である。

すでに英語による報告書は Minoru Ozawa (ed.), *Proceedings of the International Workshop "Old Icelandic Texts in Medieval Northern Europe"*, Tokyo: Rikkyo University 2013, 85 p.として刊行された。また当日の様子の記録と日本語レジュメは、近々刊行される『立教大学日本学研究所年報』の 12 号に収録される予定である。

翻訳は、信州大学人文学部の伊藤盡准教授の手を煩わした。古英語ならびに古北欧語の文献学を専攻する氏は、その専門性のみならず、著者とも親しい関係にあるという点において、本稿の翻訳者として最もふさわしい人物である。厚く御礼申し上げたい。